

古義堂と医学書

福田 安 典

宝曆期に京都で出版された洒落本『本草妓要』は不思議な本である。⁽¹⁾ そのタイトルから清の汪訥庵の『本草備要』（康熙甲戌年刊）のパロディであることは一見ははっきりしているようである。序文は、

（妓）金之可溜而足以死苦者必齎甫之事也

（備）言之可貴而足以垂後者必性命之文也

という記述から、末尾の、

（妓）苟色道之可觀倘不至諸諷之未熟也乎

（備）苟小道之可觀倘不至致遠之恐泥也乎

まで逐語的なもじりで作られている。

ところが、この洒落本が本文のパロディとして狙っていたものは『本草備要』ではなく、日本の香川修庵の『一本堂薬選』（上中編享保一六年、下編享保一九年、続編元文三年、以下『薬選』）をはじめとする修庵の医学書であった。一例を示せば、

凡妓之美惡真偽固、漂客之所当識辨、妓不真美苟、不可買、

（本草妓要）

凡藥之美惡真偽固、医人之所当識辨、藥不真美病不可愈、

（薬選）

という具合である。この『薬選』は刊行されているが、『本草妓要』

においては、刊行もされず門人の中で写本でのみ流通していた『一本堂行余医言』も使用されている。作者は相当に香川修庵にこだわっていると考えられる。

では、この作者の正体は何者であり、この作品の意図は那边にあるのであろうか。『本草妓要』には、作者の出自を示す貴重な「偶クダマ記予少時游二堀川一」という記述がある。その一文を手がかりとすれば、堀川は修庵の医塾・一本堂があった場所なので、作者は堀川での遊学経験があり、おそらくはそこで医学を学んだ人物なのであろうことまでは予想できる。そこから本論を始めてみたい。

1 香川修庵と伊藤仁斎

当時の堀川には高名な漢学塾があった。伊藤仁斎・東涯親子が堂主となった古義堂である。その仁斎門で、医学を後藤良山に受け、儒学と医学は同じとして「儒医一本」を唱えたのが先の一本堂当主香川修庵であった。伊藤東涯は修庵の墓碑銘に、

龐夫素靈之說、以立一家之言、其意以謂聖道医術一其本而無二致、遂名其堂曰一本云、

（当時の医学の重要書である『素問』『靈樞』を否定し、一家言

を立てた。それは「聖の道」（儒教）と「医術」はその根本は一つだというものである。ゆえにその堂名を「一本堂」と謂うと記している。修庵が素（素問）（靈）（靈樞）を批判し、聖道（儒）と医術が一本であるとしたことを東涯も認めていたのであるが、その評価に至る経緯は決して平坦なものではなかったであろう。

修庵が伊藤仁斎に傾倒したことは、古義学にも傾倒していたことを意味する。そこで、宋代の李朱医学を批判し、『素問』『靈樞』すら批判し、『傷寒論』の昔へ戻ることを提唱したのである。彼の出版した『小刻傷寒論』は「江戸中期の医書の最大のベストセラー」と言われている。ゆえに、彼の一派を「古方家」と言い、中国の最新医学を受け入れてきた「後方家」と分けて論じられるのが一般的だが、この古代回帰という単純で甘美な理念は人畜無害の人文科学では可能であっても、人命に直結する医学の領域では問題があるのではないだろうか。なぜなら、通常、技術の発展とともに進歩するのが自然科学のありかたであり、中国医学の発展とともに我邦の医学もそれに追随するものであるからである。古代に回帰せよという修庵の学説は特異であつただろう。また修庵は「自我作古（我より古を作る）」という傲慢な発言により当代医学界から響響を買つてもいた。結果として修庵の学説や存在は認められるものではなく、香川流は広がらなかつた。その後には香川流とは関係の薄い山脇東洋や吉益東洞らが独自に古方医学で気を吐いて古方家は命脈を保つたにすぎない。しかしながら、そのあだ花であつた修庵の学説は当時の多くの若者を魅了し、門人を多く擁し、その中には読本創始の都賀庭鐘もいた。また、修庵に徹底的に反応したのが平賀源内であつた。修庵がいなければ平賀源内のあり方も変わつていたのであろう。

修庵が攻撃したのは宋代以降の医学だけではない。仏教や道教も「此皆道家方士誣惑不經之邪説」（『葉選』凡例）のごとく過激に批判した。

そもそも、唐時代に孫思邈という道教色の強い人物が著した医学書『千金方』『千金翼方』が後代まで活用されるように、道教と医学とは関係が親密である。

吉田意安は慶長二年「歴代名医伝略」に、

夫明性理者儒学而、保寿命者道教也。兼有之者医而已。豈謂非大道也耶。

（それ、性理を明らかにするものは儒学にして、寿命を保つものは道教である。それを兼ねるものは「医学」のみ。豈に大道にあらずと謂はんや）

と記し、医学は儒教と道教とを兼ね備えると説いている。現在の学問体系で言えば、自然科学の代表である「医学」と、人文科学の思想「道教」とは交わることは少ないであろう。しかし、近世期に於いて儒教や朱子学が幕藩体制の中で展開する段階では、医学と道教は親和性が高かつた。両者ともに不老長寿を目指すという共通目標があり、そのためには薬や丹を開発するという似た学問形態を共有し、時には導引術や養生などの必要性をとともに説くのである。そもそも医薬の祖たる神農がどこか人界を超越しており、孫思邈をはじめとする名医数人が『列仙全伝』に名が見えるのである。

また、金文京が指摘するように、近世中期に日本の文人の数名が「山人」「散人」を名乗る。有名なのは風来山人を名乗る平賀源内、蜀山人・大田南畝、生駒山人・森文雄である。この「山人」が仙人や道教に近いことは言うまでもないが、彼邦の「山人」が医薬を業

とし儒学に通じていた点に注意したい。本草学や儒学に通じた平賀源内が山人を名乗るのも偶然では無いのであろう。道教と医学はかくも親和性が高いのである。その関係を前提とした時、やはり香川修庵の道教批判は異様であろう。そもそも修庵を高く評価していた都賀庭鐘ですら「鹿鳴散人」(『開卷一笑』)を名乗っているのである。

この修庵の道教嫌いも、やはり古義堂もしくは伊藤仁斎の影響と見るべきであらう。よく知られているとおり、仁斎の学問形成には朱子学への傾倒と超克があり、仏教や陽明学、老荘にも関心を広げたが、それらを乗り越え『論語』と孟子に到着したのである。ゆえに例えは、

禪莊の理を以て孔孟の書を説く者の若きは、是れ其の父を殴つ者なり。其の孔孟の旨に非ることを辨ずる者は、是れ其の父を拯ふ者なり。(『童子問』)

とあるように老荘には手厳しい。修庵の仏老への嫌悪はまったく仁斎の口吻と似ている。それは医師としての領域を越えて、儒者への傾斜を示すものであろう。修庵の「儒医一本」については優れた論考が多く備わることが、要は儒学、特に仁斎学と結びついたことが、「医師」としての修庵にとつては逆に不幸であったという皮肉な物言いも可能であらう。

日本近世社会が儒医にこだわるのは、近世初期に急に為政者によって押しつけられた儒学、朱子学の側にこそ、ややもすれば方技の術たる医学と並べられかねないという屈辱の危機があったからであらう。高山大毅が『子孫鑑』(寛文一三年刊)を引きながら、

儒学の「道」は、「天道・神道・仏道・儒道・歌道・医道」と列挙されるように諸道の一つに過ぎず、儒者は、儒学の立場か

らすると「小道」を業とする者に過ぎぬ「医者」や「兵法者」と同列の芸者と見られていた。

と指摘しているように、儒者の立場から医学を称揚することには抵抗があったはずである。高山が紹介するように、水戸光圀がわざわざ「儒者」を「医者陰陽師」と区別したことが後世まで美談とならざるを得ない苦しさがあったのである。

医学を「小術」とみなすこと、もしくは陰陽道(医陰両道)や出家と同等にみなすことに対する抵抗の歴史と医師側の自負は安西安周「日本儒醫研究」(昭和一七年)に詳しいが、安西のこの書は大東亜戦争の昂揚感のまま「儒醫は国家を治するの志をもつて醫を行ずる」という結論に様々な事例を牽強付会したものである。事実は、並河天民が吐露した「儒学では食べて行くことができないので医を兼ねるのだ」という証言あたりが儒医の偽らざる実態であったのだろうと思われる。

その流れを受けて、伊藤仁斎の有名な「儒醫辨」(寛文四年甲辰六月初二日)が書かれた。その中で仁斎は、

甚哉。人之竊名而欺俗也。物已定。而文飾之以求銜于人。道已定。而粧點之以求售于世。其價不可増。而譏笑隨之。豈非惑乎。世俗有儒醫之稱。蓋醫而窺儒者。自恥其爲小道。且與巫覡賤工伍。而竊欲列于儒。以表見其名。其事固卑陋最小。無足深辨者矣。然世之貪汚卑屈。懷欲無厭。屢試不第。抑鬱迷昧。不能以自立者。多逃儒而歸之。則固不可不爲世道之害焉。斯吾之所患也。

(甚だしいかな。人の名を竊みて俗を欺くなり。物已に定りてこれを文飾して以て人に銜ふことを求む。道已に定まりてこれ

を糞點して以て世に售ることを求む。その價増すべからずして譏笑これに隨ふ。豈に惑ずや。世俗「儒医」の稱あり。蓋し医にして儒を窺ふ者、自らその小道たること、且に巫覡賤工と伍するを恥ぢて、竊に儒に列して以てその名を表見せんと欲す。その事固に卑陋最小。深辨するに足る者なし。然れば世の貪汚卑屈、欲を懷きて厭むことなし。屢々試みて第せず。抑鬱迷味、以て自立すること能はざる者、多く儒に逃れてこれに歸らんとす。則ち固に世道の害をなさざるべからず。これ吾の患ふところなり)

と儒医そのものを批判した。先の『子孫鑑』と同時期の執筆である。それを承けて太宰春台も儒医を蝙蝠と呼んで痛罵している。

ところが後の天和三年に香川修庵が生まれ、元禄の終わりから宝永にかけて修庵は仁斎に五年間学んだ。仁斎の最晩年の弟子であったのである。そして、儒医一本論という師匠とは全く異なる学説を提唱するに至ったのである。

修庵は弟子の浦上元東に「修庵香川先生儒而隱于醫（香川修庵先生は儒学者であつて医に隠れた）」と評された（『家藏喜事』）。これは「古の至人は朝廷に居らざれば必ず医卜に隱る」（明・俞弁『統医説』）とあるような隱医を修庵に重ねたものである。若き仁斎は決してこのような存在を認めなかつたであらう。しかしながら、晩年の仁斎は彼を認めたようである。修庵は『葉選』の跋文で、

予少時。自播來京。受学於仁齋伊藤先生。大義略通。

（私は若いときに播州から京都に來た。学問を伊藤仁齋先生に受けてはば大義を會得した）

と云い切る。儒医に敵しかつた仁斎はなぜか修庵は別であつた。そ

して宝永二年に仁斎は他界した。仁斎が晩年に會つたこの異様な愛弟子が古義堂でどのように見られていたのかは、次期古義堂主の伊藤東涯の言説から探つてみたい。

2 伊藤東涯と医学書

仁斎の跡を襲つた伊藤東涯およびその周辺は、香川修庵の医学書をはじめ本草書や医学書に序文を寄せている。そのおもな作品をあげてみる。

享保一三年 香月牛山の『葉籠本草』に東涯の序

享保一五年 『葉選』上卷「享保庚戌長至日 伊藤長胤撰」（伊藤東涯の序文）

享保一十九年 『葉選』下卷「享保十九年歲次甲寅孟冬下澣 龍洲伊藤元弘謹書」

正徳五年 『小刻傷寒論』「正徳乙未之歲仲冬朔伊藤長胤」（伊藤東涯の序文）

その他 『新刊花鏡』（清の西湖花隱陳子を丹羽正伯が刊行、東涯の序）

東涯らは、その医学書序にどのような言説を記したのであるか。聖賢之道。赫奕宇宙。本無窈冥希夷之可託。亦無怪奇變幻之可駭。降及後世。攻其道者。襲虛無之說。淫述數之瑣。挽和牽搭。支蔓日滋。身誤誤人。貽害匪一。欲爲作一書。祛其疑。訂其譌。斐其榛蕪。以發揚壽世之真詮。而未果。屬者。齋其所著『葉選』三卷。

（聖賢の道、宇宙に赫奕として、本より窈冥希夷の託すべきことなく、亦た怪奇變幻の駭すべきなし。降りて後世に及びてそ

の道を攻むる者、虚無の説を襲ひ述数の瑣に淫し、挽和牽搭。支蔓日に滋し。身誤まれば人を誤る。害を貽すこと一に匪ず。爲に一書を作りてその疑ひを祛けその譎を訂し、その榛蕪を芟て、以て寿世の真詮を發揚せんと欲して未だ果せず。屬者、その著する所の『葉選』三卷を齎らしし。

聖賢の道は宇宙に赫奕として怪奇變幻に駭せられなかつたが、後世になると虚無の説が横行したことを嘆き、それが医学の道にまで及ぶ弊害であるので、それを糺す医師が必要で、それが修庵であり、その爲に『葉選』が執筆されたのであると東涯は語る。続いて「因謂天下無二道。聖人無兩心（因つて言う、天下に二道なく、聖人に兩心なし）」としたうえで、

聖人既叙之弊倫。建之礼楽。而又置医葉之官。

（聖人は既に弊倫を叙し、礼楽を建て、又医葉の官を置く）

今学聖人之道。以處天地之間。相安乎綱常礼楽之中。而言濟生之方。則祖襲虚無。習伝奇奏。以爲其道。此香川氏之所慨也。

（今、聖人の道を学びて以て天地の間に處り、綱常礼楽の中に相ひ安んじて濟生の方を言ふときは、則ち虚無を祖襲し奇奏を習伝して以てその道となす。これ香川氏の慨する所なり）

と続ける。修庵のあり方や医学を「聖人の道」「礼楽」と関連づけている点が注目される。古義堂を代表する東涯の考える「儒医」の概念がここに見られるのである。先に見た仁齋の「儒医辨」との違いは明らかである。

さて、東涯の本草学への関わりは、修庵だけにとどまらない。明時代に李時珍の『本草綱目』が出版された。そのインパクトは強烈で現在にも及ぶ。その影響の大きな反応として、当代きつての本草

学者稻生若水の正徳四年和刻本上梓が挙げられる。東涯はその稻生若水校閲『本草綱目』に序文を寄せている（句説点、「」は適宜付けた）。

昔有人問陶隱居。「吾欲註『周易』『本草』、孰先？」

昔、ある人が陶淵明に尋ねた、「易」と「本草」のどちらを先に研究すべきでしょうか、と。儒学と医学の葛藤はこの一言から始まったのかもしれない。当然ながら、儒学が優先されるべきであり、陶淵明の回答も、「隱居曰、「易」宜先」というものであった。ところがその理由は少し奇妙であった。

「註『易』誤尚不殺人。註『本草』誤則有不得其死者矣。世以爲知言」

『易』の註を誤つても人を殺さないが、『本草』の誤註は人を殺すというのである。だから無難な『易』からやりなさい、ということである。

仮にも小術の医学ではなく、経世に携わる儒学に身を置く古義堂当主として、この逸話は許せないであろう。東涯の序文は、続いて子西の反論を載せる。

唐子西記『易庵』、不然其説曰、「註『本草』誤、其禍疾而小。註『六経』誤、其禍遲而大。隱居知『本草』之爲難、而不知『経』尤爲難」

（唐の子西は『易庵』にその説が正しくないとして記して曰く、『本草』を註して誤るは、その禍は疾にして小。『六経』を註して誤るは、その禍遅にして大。隱居は『本草』の難なるを知りて、『経』尤も爲り難きことを知らず」と）

東涯はこの子西の説を大いに支持するが、結局は、「子西氏之所

見雖正、隱居氏之説亦不可忽。(子西氏の見るところ正しきといえども、陶隱居の説もまたゆるがせにはできない)」として、稻生若水の偉業を称え、

此書行于世、其於滲世之澤、亦豈鮮々乎哉。此聖人之所必取也。(此のような医学書が世に行われると、その恩沢は大きい。これも聖人が必ず取るところであろう)

と結んでいる。東涯は儒学と医学とを仁齋のように峻別して対立するものとは見なかつた。そこに香川修庵と一脈通じるものがあり、両者の終生変わらぬ厚誼が生まれる余地があつたのであろう。

また、東涯と本草学との関わりは存外に深く、名物学にも及んでいる。東涯自身が『名物六帖』を編纂していたこともあるが、松岡恕庵の『救荒本草』(正徳五年)に続いて、江村如圭の『詩経名物辨解』(享保一六年)にも序を寄せている。

江邨氏之先。世通儒医術。積徳百年。(中略)如珪氏。夙耽学尤精本草。

(江村氏の先祖は「儒医」の術に通じ、徳を百年積んできた。如珪氏もまた学に耽り、本草に精しい)

『詩経』の名物学的考究者の資格として、単に本草学に精しいだけではなく、家系としての「儒医」を求めているのである。

仁齋は若年に「儒医」を糾弾したが、晩年には香川修庵のありかたを容認していた。その意識は二代目古義堂主伊藤東涯に受け継がれ、さらに許容の幅が広がったかに思われる。東涯は儒医の存在をより積極的に認めたと考えてよいであろう。そもそも先に名を挙げた並河天民自体が伊藤仁齋の高弟であり、儒医と古方医学を自認していた人物である。古義堂と医学とは極めて近い関係にあつたので

ある。

香川修庵は宝暦五年二月一三日に七三歳で歿した。嵯峨小倉山の二尊院に葬られたが、その墓碑を記したのが他ならぬ伊藤東涯である。ちなみに伊藤家の墓所も二尊院にある。道一つ隔てた場所である。その距離は古義堂と儒医一本堂との近さを象徴しているよう。

3 再び『本草妓要』から見えるもの

『本草妓要』に話を戻してみよう。修庵の教え子がこの戯作を製作したのであるが、その秘やかな狙いがようやく見えてきたようである。

香川修庵という儒医の存在は当時異端とも言うべき存在であつた。特に仁齋に学んだ世代にはそうであつたであろう。ところがその次世代に修庵はもてはやされたのであつた。いつの時代も「時代の寵児」には若き者の多くが門を叩くが、そこに群れなす者すべてが信奉者であるわけではない。一癖も二癖もある若者が堀川の本堂に集まるものの、彼らの興味や関心は多様であり、中には修庵先生への屈折した敬意を持つ者もいたであろう。修庵には次の逸話がある。

香川太冲若かりし時治療の爲に奔走せしに、つひに途中にて小水を使せし事無し。門人いかなる故ぞと問しに、我家に帰り便すれば百姓の耕作を利用する事なり。奈何ぞ途中無用に使しすてんやと答へられしとぞ。太冲元来豪放の氣質なれども志す所は深切にて殊勝の事なり。

(『北窓瑣談後編』卷二)

香川修庵は治療の最中に小用をしたことがない。必ず家に帰るまで我慢するのである。門人がその理由を尋ねたところ、これは農家の肥料となるので大切にすると云つたという。これを聞いた門

人や『北窓瑣談』作者の橋南溪は修庵の信奉者であったから「殊勝」と好意的に捉えるが、必ずやからかいの対象とする愚弟子もいたであろう。『本草妓要』の作者はその後者の一人ではないだろうか。

そもそも、修庵の医学書と『増訂本草備要』という清の本草書を組み合わせることに、これが師匠への冒瀆に近い行為なのである。高橋真太郎氏は修庵と『本草備要』を対比して「中国の薬物療法と其影響」、「明治前日本医学史」二巻所収、

当時の清代の医家にして本草を論ずるものには、陰陽五行、五運六氣を断ち、香川修庵の如き、明確截然とその立場を明かにした説を唱えたものは全々無かつたのである。即ち、当時清代の医家の間で（中略）賞用された汪昂の『増訂本草備要』：等の如きものも、その所説は従来の李朱、劉張の学説の枠から一歩も超脱しておらない事実より見ても明らかである。

と述べ、「香川修庵の『一本堂薬選』の評価」では、この内容を中国における同時代の清朝の『増訂本草備要』や張璐の『本草逢原』と比較すると格段の差があるばかりでなく、いわゆる北方の満州族の清に制圧された人の御用学者が如何に沈滞した観念の遊戯に陥つてしまうものであるかが明白に判る気がするのである。

として、『薬選』と対峙するものとして『本草備要』を記している。⁽⁷⁾ 難波恒雄氏も、修庵の学説として、

当時、清代の医家で名著とされて賞用された汪昂の『本草備要』や張璐の『本草逢原』なども従来の李朱、劉張の学説の枠から一歩も出ていないから、こんなものはだめだといっています。⁽⁸⁾と述べている。つまり、修庵の著書と『本草備要』を組み合わせた

『本草妓要』という作品は、その組み合わせ自体が真面目な修庵先生を徹底的に見てみよう。所業の一例を見てみよう。

自⁽⁹⁾此言始作⁽¹⁰⁾一⁽¹¹⁾備後世道家方士之徒遂和鼓雷同⁽¹²⁾延及⁽¹³⁾明清⁽¹⁴⁾妓家者流⁽¹⁵⁾一⁽¹⁶⁾阿⁽¹⁷⁾世趨⁽¹⁸⁾レ好⁽¹⁹⁾殆⁽²⁰⁾依⁽²¹⁾樣⁽²²⁾胡⁽²³⁾盧⁽²⁴⁾皆⁽²⁵⁾以⁽²⁶⁾レ無⁽²⁷⁾本⁽²⁸⁾領⁽²⁹⁾学⁽³⁰⁾問⁽³¹⁾也⁽³²⁾。又⁽³³⁾清⁽³⁴⁾馮⁽³⁵⁾兆⁽³⁶⁾張⁽³⁷⁾陰⁽³⁸⁾囊⁽³⁹⁾秘⁽⁴⁰⁾録⁽⁴¹⁾曰⁽⁴²⁾。

この一節は、修庵が自書で明清医学や道教を譏る、

自⁽¹⁾明⁽²⁾薛⁽³⁾巳⁽⁴⁾出⁽⁵⁾、始⁽⁶⁾メテ⁽⁷⁾作⁽⁸⁾レ⁽⁹⁾備⁽¹⁰⁾

此皆道家方士誣惑不⁽¹⁾経⁽²⁾之⁽³⁾邪⁽⁴⁾説⁽⁵⁾

吠声耳食之徒、不⁽¹⁾レ察⁽²⁾、是⁽³⁾非⁽⁴⁾、和⁽⁵⁾鼓⁽⁶⁾雷⁽⁷⁾同⁽⁸⁾

宋元明清医家、弊⁽¹⁾習⁽²⁾多⁽³⁾年⁽⁴⁾

惑⁽¹⁾ニ⁽²⁾時⁽³⁾流⁽⁴⁾媚⁽⁵⁾ヲ⁽⁶⁾世⁽⁷⁾ニ⁽⁸⁾之⁽⁹⁾甘⁽¹⁰⁾言⁽¹¹⁾

盲⁽¹⁾搜⁽²⁾之⁽³⁾徒⁽⁴⁾、依⁽⁵⁾樣⁽⁶⁾胡⁽⁷⁾盧⁽⁸⁾

馮⁽¹⁾兆⁽²⁾張⁽³⁾錦⁽⁴⁾囊⁽⁵⁾秘⁽⁶⁾録⁽⁷⁾ 云⁽⁸⁾

という医書の記述を寄せ集めたものである。「明清妓家者流、世に阿る」は、修庵なら「明清医家者流、世に阿る」と語るべき所である。その明清医学を否定していた修庵の言説が、清代の『本草備要』のパロディとして展開されるとは、泉下の修庵も驚きであつただろう。

修庵については、明和七年の南川維遷『閑散余録』では、

京都ノ人ノ諺ニ、宇野三平ガ出テ歩行ト、香川太冲ガ病者ヲ治セルト、谷左仲ガ文章ヲ撰ルト、此三ヲ見タル人ナシトイヘリ。という京都の悲説が書き留められ、平賀源内も盛んに修庵を揶揄している。儒医という概念規定や古方医学というありかた、すなわち古義堂の学統を医学に持ち込んだ在り方にはやはり無理があつたの

かもしれない。

5 結論に代えて―都賀庭鐘―

かかる戯作が生まれるような風景が一本堂（古義堂）周辺にあったのである。

その享受を含めた周辺への波及はそのままだ江戸漢学の豊饒を示すものだが、修庵の塾に学び、中国小説を日本文学に取り入れた新たな小説ジャンル、読本『英草紙』を創作した都賀庭鐘を以て本発表の締めとしたい。⁹⁾

庭鐘の文芸活動については先学の多く指摘するところ、その中国趣味は他を凌駕するかの如きである。その塾は「辛夷館」という医塾であったが、当然ながら医学のみならず、中国趣味が横溢していた。その様子を、田世新は次のように記している（明和六年、『投壺今格』）。

東方昇平。藝林郷化。琴棋書画之類。百家翮々而起。惟投壺、時行時藏。於我浪華乎。昔日有大枝翁者。欲張此枝而未得其志。爾後継者寥寥。郷者辛夷園。有竹壺之制。

（東方によりやく文化が咲き、琴棋書画の類は大いに一家をなす者も増えた。しかし、投壺だけは流行ったり廃れたりしている。ただ、わが浪華には大枝流芳翁がいて、投壺に志すものがあるが、いまだにその志を得ていない。しかる後、後継者は寂しい状態だが、都賀庭鐘の辛夷館では「竹壺」の制度がある）

漸く日本漢学の熟成とともに、琴棋書画は盛んになってきた。しかし「投壺」については、大枝流芳が『雅遊漫録』（宝暦一三年）で紹介しながらもその後継者はいなかったという。この「投壺」は

もとは「礼記」に基づいている。その中国古代の礼楽が、儒学の塾ではなく、医学を兼ねた「儒医の塾」で実践されていることに注意したい。

その発想は儒学と医学を一本に捉えた香川修庵の一本堂で芽生えたものだが、その発想そのものの源泉を訪ねるとやはり京都堀川の古義堂に遡るのであろう。

一般的な考え方ではないだろうが、上田秋成とも親交があり、自身は「医師」でもあった勝部青魚が、

学問も、仁齋、徂徠など古学を唱へられて、其余風医者へ移りて、めつたに傷寒論金匱と称し、乳臭の童も、仲景、孫思邈を口にす。当時、古方家、後世家と二派に成たり。それが和歌に移て、万葉々々とかまびすし。
（『剪燈隨筆』卷之三）

と発言していることは興味深い。漢学の古学→医学→国学と認識している人間がいたのである。

日本近世文学では国学に関する研究が多くなる傾向があり、思想界では仁齋、徂徠に集中するが、その両者の周辺に古義堂の影響を受けた医学（香川修庵）を置く必要を提示しておきたい。

しかしながら、そのあり方はあまりにも特殊であったため、以後修庵の唱えた古方医学は山脇東洋や吉益東洞らという俊英をもって再提唱される必要があり、庭鐘の医学および医学塾も長続きはしなかった。古義堂系の医学は図らずも仁齋が「抑鬱迷昧。不能以自立者。多逃儒而歸之」と語るようなアダ花として散ってしまったことくであったのだろうか。

注(1) 拙著『平賀源内の研究 大坂篇』（ベリかん社、二〇一三年）、『医学

書の中の「文学」(笠間書院、二〇一六年)。

- (2) 「座談会 香川修庵を語る」(『漢方の臨床』44―5、一九九七年五月)。
- (3) 金文京「明代萬曆年間の山人の活動」(『東洋史研究』61―2、二〇〇二年二月)など。
- (4) 引用は『近世思想家文集』(岩波書店、日本古典文学大系97、一九六六年)。
- (5) 町泉寿郎「香川修庵の「儒医一本」の儒について―『大学叢』を中心として―」(『日本医史学雑誌』44―1、一九九八年三月)の冒頭に簡単な従来の研究史が載せられている。
- (6) 高山大毅「近世日本の「礼楽」と「修辭」」(東京大学出版会、二〇一六年)。
- (7) 『漢方研究』3―14(一九六九年)。
- (8) 前掲(2)「座談会 香川修庵を語る」。
- (9) 「都賀庭鐘」(『国文学 解釈と鑑賞』59―8、一九九四年八月)。